

シスターラップ!

SISTER TRAP!

08990-

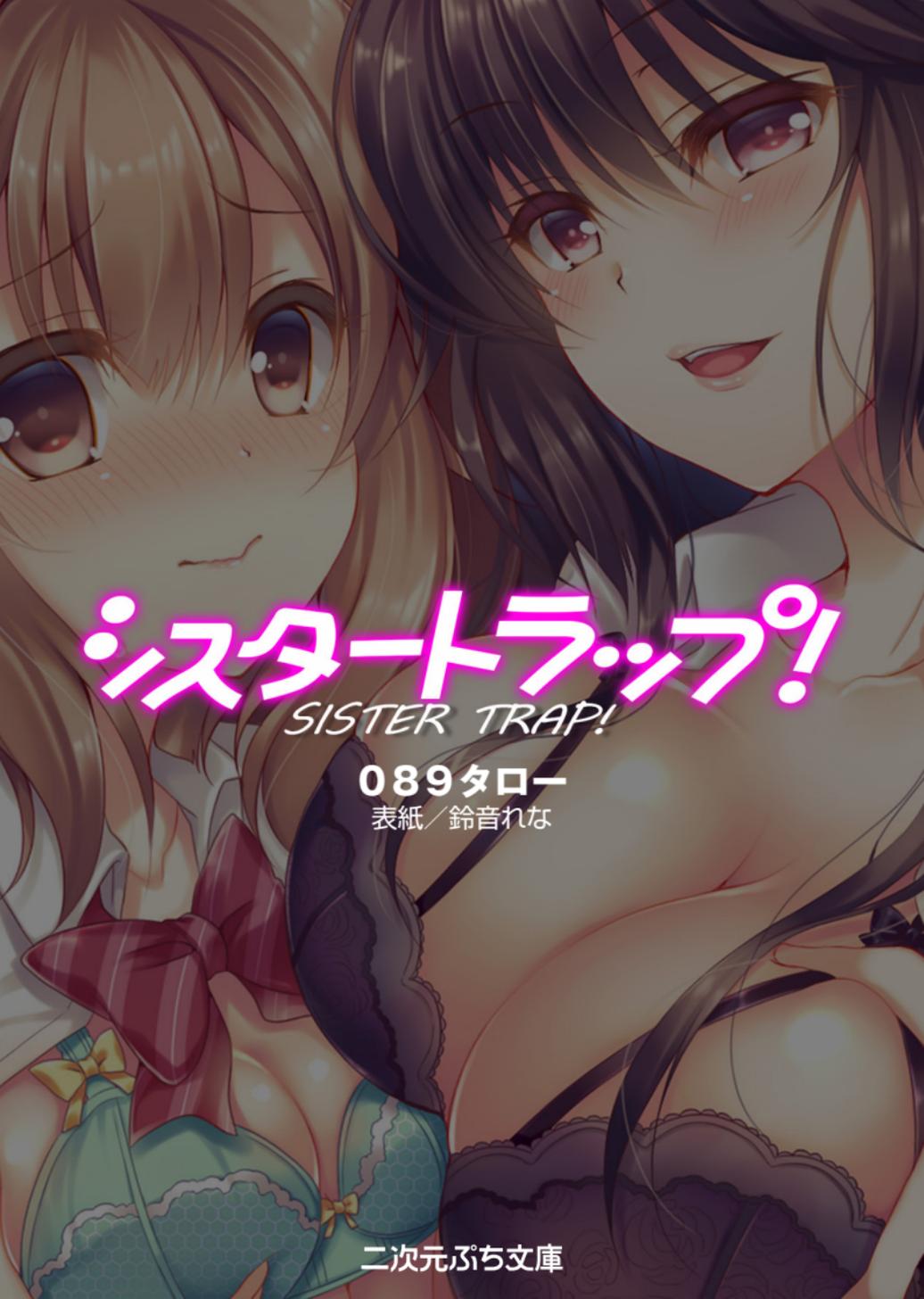
表紙イラスト: 鈴音れな



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『シスタートラップ!』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



シスターラップ!

SISTER TRAP!

089タロー

表紙 / 鈴音れな

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

しゅんすけ

俊介

やや流されやすい男子学生。弱みを握られていることもあって、姉に性的にいびられ続ける日々を送っている。しかし、性欲も相まって拒みきれないでいる。

れいな

麗奈

俊介の姉。エッチな身体をしたエッチなイタズラ大好きな美少女。意地悪でサディスティックな性格をしている。

みちる

俊介のクラスメイト。優等生。俊介のことが好きらしい。少しばかり独占欲が強いところがある。

「ただいま」

俊介は、ちよつと赤面したまま、制服姿で帰宅した。手には衣料品メーカーのロゴの入った紙の手提げ袋。一見何が恥ずかしいのか分からない様だが、紙袋の中身を聞けば、おおよその人は納得してくれるだろう。

への字口で一つ溜め息をつくど、リビングへと足を運ぶ。するとまだ入りきらぬうちから、透き通つたような声が届いた。

「おかえりシユン。ちゃんと買ってきた？」

フローリング製のリビングに入る俊介。彼を迎えた声の主は、長いソファに優雅に腰掛け、雑誌を手にとつすらと微笑んでいた。

煌めくような艶のある黒髪を、フワリと背に長く伸ばした、どこか猫を思わせる瞳の美少女である。紺色のブレザーに膝上までのスカート、つまり俊介の学校指定の制服に身を包み、肘掛に軽く頬杖をついて少年を見つめている。組んだ足からは瑞々しく張りのある太腿が覗き、薄いニーソックスに覆われた脹脛がゆるりと揺れる。

「……買ってきたよ、お姉ちゃん。まったく、男のボクにこんなの買わせるなんて、拷問もいいところだよ！」

弟の不満を聞き、姉——麗奈がくすりと笑った。それは悪戯っぽく、やや意地悪な笑み。「んふふ、そうね。女性の下着売り場なんて、男が来るだけでも変に見られるものね？」

ましてや、こんなの買つていけば、尚更ね」

そう言つて受け取つた紙袋から取り出したのは、レースの入つた黒い上下の女性下着。実に色気満載の大人のブラとショーツ。明らかに十代後半の少年少女が買う物ではない。

「恥ずかしいつたらないよ！ 店員にも客にも、『何だこのスケベ少年』みたいに見られてさ。あげくにサイズまで聞かなきやいけないなんて、もお頭沸騰しそうだって！」

その場を思い返して赤面する俊介。せめて黙つて買つて帰るだけならよかつたが、生憎姉のブラのサイズは、ちよつと店頭に置くには大きめである。

八十九センチのFカップ。学生としては立派すぎる大きさ。おかげで肩が凝るとは姉の弁だが、見る方にとってはありがたい代物である。つい妄想して姉の胸元をチラ見すると、たつぷりとお椀型に膨らんだ胸肉が、ブレザーを押し上げて窮屈そうにしていた。

「どこ見てるの？」

「えっ？」

麗奈の声に、上擦つた声を返す少年。そんな弟に、姉は意地悪っぽい笑みを強めた。

「ほんと、いやらしい弟ね。だから実の姉のパンツでオナニーなんてできるんだわ」

痛いところを突かれ、むう、と押し黙る俊介。思い出すだけで身悶えしてしまうような映像が脳裏を過る。

それは数年前。エロ本を密かに買い、息巻いて帰つたある日のこと。先にさっぱりして

から自慰に励もうと風呂場に向かった俊介は、脱衣所で初めて先客がいることに気づく。共働きの両親ではない。となれば、考えられるのはただ一人。姉の麗奈だけだ。浴室のガラス越しには、確かに姉と思える人影が、シャワーを浴びていた。発育のよい滑らかな肢体が脇を、胸を、太腿を撫でるように洗われていく。そしてさらに脱衣籠の中には、脱ぎたてのはずの白いショーツとおそろいのブラ。

（ゴクツ……これ……お姉ちゃんの下着！）

すでにこの後の自慰の予定で燃えていた少年には、巷で噂の美少女姉のほかほか下着はあまりにも目の毒だった。

（ちよ……ちよつとだけ触ってみよ……）

そんな誘惑に駆られて姉下着に手を伸ばしてしまう。が、限度を知らぬ若い欲望は留まることが知らず、サラサラの布地を顔に近づけ、匂いを嗅ぎ――。

（うわぁ……甘酸っぱくて刺激的で……いい匂い！）

思春期に入ったばかりの少年は、矢もたても堪らずジッパを下ろし、股間をクニクニと弄り――そして夢中になって、人の気配にも気づくことなく――。

「んふ。何してるの？」

「!?◇△¥# \$ &%♀*!!」

後はお約束。あえなく姉に見つかり、硬直した弟は止めることもできぬまま、姉の携帯

電話に現場写真を収められてしまうのだった。

「……あ、あれは……気の迷い、だよ」

「そう？ 何度見ても、すつごく興奮してるようにしか見えないけどね？」

口元をにやけさせつつ携帯画面を見る姉の麗奈。そこには今もはつきりと、弟——つまり俊介の自慰現場が写っていた。

まさにこれこそが、弟少年が姉少女に逆らえぬ決定的な理由である。こんなものを誰かにばらされては恥ずかしくて外も歩けない。おかげで彼女にはいいように使われっぱなし。

「それに、こんな本を見てるようじゃ、いつ欲求が爆発してもおかしくないわね」

「あ!! それ、またこんなところで読んで！」

今更気づいて声をあげる弟。姉が先程から開いていたのは、彼の秘蔵の一品で、以前提出させられた物だった。

「ずばりエロ本。しかも内容は近親相姦モノ。普通、家族には絶対見せたくない代物だ。」

「大丈夫よ。親にはまだ言っていないし、見せてもいないわ」

「当然だよ！ そういう約束だろ」

呆れと困惑の混じる心境の俊介。せめて見るなら、自室でだけにしてほしいものだ。

だがそんな反応を、面白がるように見つめる姉の麗奈。そして唐突に話題を変えてきた。

「足、蒸れちゃって。いつもみたいにお願い」

「! う……うん、分かったよ……」

突然の命令にも素直に従う弟少年。姉足のソックスを丁寧に脱がすと、すぐにキッチンから濡れタオルを持ってきて拭き始める。

常識的には、明らかに悲惨な光景。が、弟は当然逆らうこともできず、諸々と従う他ない。もつとも、彼に明確な反抗の意思があるのかと問われれば、それもまた微妙だが。

スベスベな白い肌にゆつくりと布巾を添わせていく。微かに汗ばむ部分がキラリと光沢を放ち、湿気を漂わせて弟の鼻腔を擦る。湯気ほどきつくもない、だが確かな熱を持った、人肌の柔らかい空気。

(うわあ、やっぱいい匂い……。何でだろ、ボクの足なんか臭いばっかなのに)

それとなく顔を近づけたりして姉体臭を満喫してしまう。基本的に同じ汗のはずなのに、なぜか香ってくるのは、ほんのり甘酸っぱいような、何とも言えないよい匂い。それは彼が知っているただ一つの、年頃の異性の体臭でもあった。

(くうっ。悔しいけど、やっぱ色っぽいなあ、お姉ちゃん。それに……)

姉足を拭いつつ、チラチラと横目でその根元を覗き見る。それは足の付け根であり、当然そこには、スカートに隠されたショーツがある。そしてその奥には……。

ゴクツ、と喉が鳴る。足を上げているため、覗けそうなスカートの中身。決して太くはないのに、女性らしい滑らかな曲線を描く白い太腿。それだけでも十分に刺激的だが、さ

らに奥が見えそうとなれば、一層男心は揺れるというものだ。

「んふ☆ ほんとに呆れたエロ少年ね。お姉ちゃんのパンツ見て勃起しちゃうなんて」
えっ、と思わず股間を見下ろす俊介。興奮して、またも自らの変調に気づけなかった。

「いつも、何かさせればおっ立てちゃって。見てるわたしの方が恥ずかしいくらい」

学校の制服ズボンをこんもりと盛り上げる弟勃起を、クスクスと笑う麗奈。そして、面白がるようにスベスベ生足が一層持ち上がる。

(うわ……ちょ、ちよつとだけ……パンツが見える……っ！)

想像通りと言うべきか、見え隠れするのは、薄い紫色の大人びたショーツ。しかもそれは、買わされた記憶のある代物。花柄で飾られた生地が薄い、アダルトな艶下着。それが今、美姉の股間を覆っていると思うと、それだけで少年棒は、さらに力を増していく。

「しょうがないわね。ほら、見せなさい。オチンチン。擦ってあげるから」

(……来たっ！)

嘲笑と期待の中間くらいの笑みを浮かべる麗奈。促され、俊介の股間棒がピクンと跳ねる。チヂ、とジッパーを下げて、固まった雄棒を曝け出す。異性を意識する姉弟には異常な行為。が、彼等にとつては今更でもあった。

「いけないお肉には、お仕置が必要ね。今日は生足でしてあげる☆」

そう言う姉は、素肌の脚をス……と伸ばし、弟ペニスにキュッ、と指先を絡ませた。

（ううっ！ お姉ちゃんの足の指、ちよつとひんやりしてて……でも、ビリビリして……）
絡んだ指が、撫でるように裏筋を上下する。そのたびに浮いた血管がクニユリと動き、少し余った包皮もブルリと亀頭をくわえ込む。

「クス☆ ちゃんと綺麗にしてる？ 汚い包茎は嫌われるわよ？」

「し、してる……よお……！」

姉足が指先を立てて皮をめぐりあげる。すると中から亀頭の傘が見えた。確かに洗ってあるそこはツルリと綺麗なピンク色で、指先も躊躇うことなく、コチョコチョと刺激してくる。途端に痺れてくる勃起神経。

「あう……そ、そこ、敏感なんだって……」

「知ってるわ。アンタはココをされるのが好きなんでしょ？」

姉の足親指が股を開き、器用に弟勃起を握りこむ。そして文字通りしごくように動く。
（くう……なんか惨めっぽいけど、やっぱ気持ちいい……）

タオルと汗で濡れた白い足先が、未経験な少年勃起にスルクチュと撫で当てられる。湿り気が糊のように互いの肌を密着させ、細い爪の先がピン、と亀頭を弾く。

自身の自慰に比べれば、やや乱暴な動き。だが、予想できないリズムの淫刺激は、やはり新鮮で飽きが来ない。上り詰めそうでそうでもない。かと思えば、突然襲う強烈な快感。それらに翻弄されることもまた、自慰では味わえない大きな魅力だった。

(やばい……先走り汁が出てきた……)

ムクビクと股間で暴れる肉相棒に、心中で活を入れる俊介。しかし、そんなことで納まるほどヤワな友ではなく、姉の足責めにもめげることなく、元気にいきり立っている。

そんな弟勃起をしつかりと眺めながら、口元を薄く歪め続ける麗奈。その美顔からは微かな吐息が漏れ、小鼻はどこか期待を含むようにピクピクと揺れていた。

「あらら、えっちなお汁なんか垂らしちゃって。クスツ、足でされてるのに、恥ずかしいとは思わないの？」

(く……なんつー酷いことを……っ！)

自分から仕掛けておいて、あんまりなことを言う姉に、さすがにちよつと頭にくる弟少年。思わず麗奈を睨んでしまう。

「んふ。悔しい？ でも気にしなくていいのよ？ だって恥ずかしいトコは、いっぱい知ってるんだから」

笑いながらエロ本をヒラヒラさせると、美姉はさらに足の動きを変化させてきた。くにゅつ。すりズリ……くにゅくにゅるつ。

「あつ……！ ま、曲げないで……えっ！」

親指の股で掴んだ肉棒を、今度はそのまま横に曲げてみせた。そして足の指すべてを肉幹に触れさせると、まさに男の自慰そのものといった風にしごき始める。

重なった指が段差を作り、それがクニクニコロコロと血管を弄ぶ。曲げられた先つぼは痛みもあるが、逆の刺激は逆にペニスに力を入れさせ、姉指に負けまいと立ち上がるようにする。そのせいで、傾いた鈴口はパクパクと口を開き、さらなる透明汁を垂れ流して、姉の美指をツウ……と濡らし始めた。

「あん☆ まだ出る……しかも、こんなにトロトロ……」

「ああつ……そ、そんなに擦りつけると、ボク……つつつ！」

麗奈は濡れ足指を、器用に開いて幹全体をこすりあげる。横から見ると、まるで芋虫みたいな指の集まり。しかし、一つ一つが柔らかい指肉は、血管と皮をくにゅスリと引き揺らしながら、全体を濡れ肉棒へと変えていく。

ぬめる肉同士が、互いにぬちゃりと絡みあい、微かな光沢を纏い始める。滑りのよくなる姉しごきはどんどんと早くなり、強引に曲げられたくの字ペニスがピンピンと振れ動く。加速度的に激しくなっていく淫脚技に、雄神経はピクピクと破綻寸前。それは、まったく止まろうとしない先走りを見ても明らかだった。

（あぐつ……!! も、もう……やばい……つつ!!）

痛みすらも媚刺激と変える、巧みな姉の足ファック。皮を引つかかれ、傘裏を摘まれ、裏筋を土踏まずで擦りあげられる。見た目拷問のような仕打ちは、しかし、弟少年の精嚢を甘く誘惑して止まらなかった。

りと喉を鳴らし、少年の肉塔に唇を添えた。

「ダ、出したいなら……私が出させてアゲるッつつ!!」

「うわっ!? み、みちるさん……!」

真面目な彼女の、どこにそんな勇気があったのか。みちるは小さな唇をパカッと目一杯開いて、ピンピンに張った濡れ龟头を口に含んだ。

「ん、ぶぶぶ……んむちゅ……っ!」

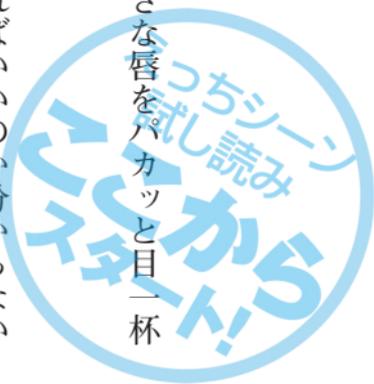
明らかに不慣れで辛そうな恋人少女。舌の動きも拙く、どうすればいいのか分からないといった感じだ。しかも時折前歯がカリ首に引っかかって、又リジヨリと敏感なところを痛刺激してくる。ヌメつく口内と硬い歯に交互に責められ、少年は痛いような、気持ちいいような、何とも言えない媚悦を味わった。

（う、嘘……みちるさんがボクのモノを……啜えてくれてるなんて……!）

いくら童貞少年とはいえど、普通の男女のベッドシーンに「フェラチオ」なるものなど、そうそうありえないことくらいは想像できる。それを、多分未経験であろうクラスメイトが目の前でシテくれている。これは少年の劣情をグラグラと揺すって仕方ない。

だがそれを見て、心中穏やかではいられない人物は、ギリりと歯を鳴らして飛びかかってきた。

「ちよつと!? それはわたしのよ!」



愛弟棒を奪われた姉の麗奈は、珍しく声を荒げながら、負けじと俊介の股に潜りこむ。みちるの頭を上押し退けるように入り込むと、まだ手つかずの袋の部分に舌を伸ばした。「うほおおうっ……!! お、ねえちゃん!」

ぴちゅ、レロレロれる……はむにゅっ……。

先っぽに意識の行っていた肉悦が、急に腰全体に広まっていく感じ。自慰の際にもまず弄らない袋を舐められ、下半身から急速に力が抜けていく。

「んふん……れる……むちゅう……ばふうっ……!!」

(ああっ……股の間まで舐められて……す、凄い優越感……!!)

姉の舌使いが上手いのかどうかは、正直分からない。だが迸る快感は本物で、舌先がコロコロと睾丸を転がすたびに、じんわりとした甘痺れが根元を覆いだし、ペニスは一ピクピクンと揺れ固まる。

「んぶっ……ぱはあっ……!! な、何よ! そんなトコ、普通は舐めないよ!」

麗奈の頭で邪魔そうなみちるは、苛立たしげに見下ろした。そして今度は顔を傾け、男根の幹を、ハーモニカでも吹くようにペロペロと舐めだす。

「うはっ……!! み、みちるさんまで……そんなにされたら……!!」

すでに敏感な傘裏をしつかり刺激されていた雄棒は、さらなる口淫に破裂寸前に追い込まれる。筋に沿ってクチュクチュと動く唾液まみれの唇。やはり多少歯が当たるが、敏感

すぎない幹の部分、それくらいでちょうどよかった。まれに歯先が皮を引っかけて伸び下ろし、外れると同時にピチャリ、とまた傘裏に当たる。その肉揺れ感も、少年には堪らなく刺激的だった。

「んん……んぱっ……はあ、はあ……んふふ、シユンはね、わたしのモノなの。んぷちゅっ……オチンポだつて見慣れてるし、イクとこだつて知ってる。んむ……姉に弄られて喜ぶ奴を、アンタは好きでいられるの？」

欲熱に浮かされつつ、牽制するように麗奈。対して、それに食つてかかるみちる。

「んぷちゅちゅ……くむ……っ、そ、それくらい、何よ！ この歳の男の子なら、女と見ればシたくなつちやうのは知ってるもの！ でも、これからは私がシてあげるんだから！」
完全に火がついた二人の少女は、互いに意識しつつ、まったく引く気がない。そして負けるものかと、それぞれの責めに勢いを込め、限界に震える暴れ肉棒に吸いついた。

「むぶぶっ、はむうんむむじゅっ……！」

みちるの唇が大きく開き、肉幹を押し倒すように横からくわえ込む。勢いがあつたせいで唇は滑り、しごきたてるようにして亀頭の傘裏まで舐め擦る。

「んれちゅうっ！ むもっ、むるれろっ！」

麗奈の口が睾丸を飲み込む。解れた袋に舌を絡めつつ、軽い甘噛みでクルクルと玉を跳ね転がす。

裏筋がねっとりとしすられ、袋がコロコロと媚転する。股の間がジンジンと痺れ、浮遊感のように曖昧になっていく。反対にサオの方は、グツグツと熱くなってきた、筋肉のように硬く膨らんでしまう。

そして、股間の芯から浮き上がってくる、液状の愉悦。

「あうううっ！　で、でるウっ、出ちゃうよっ!!」

ぴしゅウッ！　ピュルプショウッ！　ふるびゆるびゆるうつつ!!

「んん、んぶぶんんううん!!」

とうに底が見えていた少年の限界は、強い激淫の前にあえなく崩壊した。二箇所を渡る同時口淫は強烈すぎて、童貞少年の感覚では、そうそう耐えることなどできない。勉強中からすでに溜め込んでいた雄の白液は、揺れ跳ねる肉棒につられて、辺り一面に降りそそぐ。当然、間近の美少女二人の顔や髪も、べったりと白く汚してしまう。

はあ、はあ、はあ、はあ……。

誰かの——あるいは三人とも荒い息使いが、一時の静寂に木霊する。どうであれ、皆一様に、何がしかの表情を浮かべての無言。

(……嘘みたい……お姉ちゃんにも、みちるさんにも……どっちにもかけちゃった……)

そもそもここまで派手なシチュエーションなど考えもしなかったため、どこか呆然としてしまう俊介。

とつても硬くて……大好きいいいいつつ!!」

徹底的にしごきあげ、満悦の嬌声をあげるみちる。清楚な印象の彼女がこれほど淫蕩に悶え狂う姿を見ると、ちよつと恐ろしくなると同時に、やはり興奮もしてしまう。

だが、今の俊介には恋人のみを味わう精神は持てなかった。普段とは打って変わったか弱い声で鳴く美姉とも、同様に繋がりがりたかった。というわけで、多少の心残りはあるが、いくらかピストンを続けた後、再び恋人穴から姉穴へと侵入口を変える。

じゅるるつ……ぎゅぽん! ぽん、ぽん、パチン! じゅぎゅるるパチュン!!

「あああつつつ!! だめえ……今されたら、おかしくなっちゃう! クリとオマ○コが、バ、バカになっちゃううう……つつ!!」

みちるの指でこね回されていた姉口は、異様なくらいドロドロに蕩けており、自慰と挿入を同時に行われているような状況になっていた。クリトリスは乱暴に包皮を剥かれ、繋がる肉穴の僅かな隙間からもみちるの指が入り込む。ぐにゅぐみよ、ぴん、と内部が搔き混ぜられ、肉鈍が弾かれる。姉弟は挿入快感と同時に、媚痛感をも感じながら悶えよがる。

「ああん、俊介くうん、お願い、もつと私にいいつ……!」

「くううん!! だめ! だめよお……これいじよおされたら……だめになっちゃう! お姉ちゃんのマ○コつ、シユン専用になっちゃううう……つつ!!」

穏やかな少女が淫蕩に、強気で意地悪な姉が可愛らしく、それぞれ違った形で悶え狂う。

「はあ、はあ、はあ、はあつ……!!」

二人のギャップと初めての性体験に、少年の身体も有頂天。今度は下でパクパクと口を開ける恋人穴が恋しくなり、姉穴から引き抜いてみちるに突き入れる。

まるで互いの違いを見せあい、強調するかのような、独自の動きを見せる二穴。こうなるとやはりどちらも捨て難く、同時に貫いているからこそその肉悦感が、腰全体を覆いつくす。まったく単調にならない刺激。その激しくも優しく、柔らかくも強靱な締めつけに擦り切られ、勃起ペニスにはジンジンと痺れを増していく。今や初々しかった肉幹は、磨き上げられた金属のような、雄々しい輝きに満ち溢れていた。

「俊介君、しゅんすけくん、しゅう……しゅうんすうけくうんん!!」

「ああああ……んん、シュ、ン……わたしにもお……おねがい入れてええ……お、姉ちゃんのマ○コのナカ……シユンのチンポの……形にしてえええ……っつ!!」

（ああ、もうっ！ これじゃどっちか片方しか、こすれないじゃんか!!）

そろっておねだりしてくる二人の美少女を前に、なぜ自分にはペニスが二つないのかと、半ば本気で悔しくなってくる俊介。だが、ないものをねだっても仕方ない。なので少年は、必死になって二つのヴァギナを交互に貫いていった。

じゅじゅっ！ にゅぼにゅるぽっ！ きゅむむじゅるぽぶっ、ぶちやぶるぽぼっ!!

「んふああああんん!! す、すご……いいっ！ シユンの、かたくて……コリコリして

て——ええええつ!!」

「んあああああん!! いいよおお……もつとして、もつと奥ううつつ!!」

交互に抜き差しするというのは、経験浅い少年にはなかなか酷だ。何度も狙いが逸れてしまう。それでも彼女たちの雌貝は、綺麗に上下に並んでいるため、強引に押し込めばどちらかに刺さることも多かった。

そして、そうならなかった場合は、ちょうど二つの肉裂の間に刺さって、恥丘によって摩擦された。ぷつくりと膨らんだ肉の丘はプニプニと柔らかく、ペニスの上と下をそれぞれ擦ってくれて、かなり気持ちいい。さらにヌレヌレの恥毛もぐつちよりと絡みついて滑りをよくしてくれる。若干のザラつき具合と、長さも硬さも違う二種類の毛がスルチクちゅるりと媚刺激を繰り返し、『擦りつけている』という快感をもたらししていた。

「ああああ……おねえちゃん……みちるさん……ボク、ほんとに気持ちよくなって……このままだと、また……つ!!」

姉穴と恋人穴、さらにそれらの貝合わせにしごきたてられ、あらゆる快感がない交ぜになつてくる。すでに二度も果てていたがゆえに、ここまで漏らさず保っていたのだ。しかしそれも限界が迫っていた。

「んん! ……ふにやああああん!! も、もうちよつと……もおちよつとだけパンパンしてえええ……も……ちよつとで、ナカ……イクからああああつつつ!!」

可愛らしい嬌声をあげて悶える麗奈。弟を振り仰ぐその顔は、涙と涎でべとべとだった。さらに、腰に引つかかったままのブレザーも、愛液と精子でドロドロ。まるで愛すべき奴隷を可愛がっているような気分になって、少年の心はさらに昂る。

「あうううううっ!! わ、わらしがイクまで……っ、突きまくってえええっ!!」

姉とは対照的に、絶叫に近い声をあげるみちる。ただ一つ残ったスカートをズリズリと床にこすりながら、狂ったように股間を押しつけてくる。どこでこんなことになったのかは知らないが、驚くべき変貌ぶりで悶えよがっている。彼女の場合は入れられるばかりでなく、自ら女口をコネくり回し、快楽を貪っていた。当然、麗奈と俊介の性器も弄るのを忘れない。

(ど、どっちも可愛くて……いやらしくて……きもちいいよっ!!)

すちゅううっ! ズルチュグチョッ! ジュグジュグズルクチョ! パンパン、ぐちゅにゆるりずりずりパチュチュゆんっ!!

みちるの膣はとどめとばかりに、大蛇を飲み込むような勢いでペニスを吸い込んでいく。打てば打つほど、膣洞は大きく口を開け、ウネウネと脈打ちながら奥へと招いていく。それは子宮口に辿り着いてもやめることがなく、パクリと開いた丸い穴に、コリコリと亀頭を押し当ててくる。少し硬い感触に、先端がビクリと震え、思わず白蜜が漏れそうになる。対する麗奈の中は、柔らかい刺激をさらに小刻みに繰り返しながら、やわスルにゆるり

と、温刺激してくる。奥へと導く動きをしながらも、決して乱暴ではない、包み込むような愛撫。しかし時折、恥じらうようにクニユリと降りてくる子宮口に、女の本音が垣間見られているようで可愛らしい。切れた膜の欠片もフニユリと傘裏を撫でてきて、『どうかいかないで』とでも言っているかのようで、男心と男根を擦つてやまない。

「おおおおおつつつ!! も、もう、イクつつ! イっちやうよおつ!」

強烈な二穴の肉快感に責め立てられ、亀頭がパンパンに膨れ上がる。幹は脈打ち皮が伸び、睾丸はキュウウツと締まって精液の発射準備にかかる。

だが、どちらで『出す』かが、まったく決まらない。そもそもタイプの違う二種の媚穴に、優劣などつけられるはずもない。ひたすら交互に愛する人たちを穿ちながら、俊介は覚悟を決めた。

(もお……やけくそだ……つつ!!)

目を閉じて、最後の瞬間を待ち構える。乱舞のように肉鈍を前後させながら、運を天に任せることにした。

(どっちに入っても仕方ない! どっちのおマ○コでイつても……つつ!)

「あふああああんんん!! もおらめええ……イツくうう……つつ!!!」

「んんああああああ!! イかされるう……きやうつ! イかされちゃううう……つつ!!!」

どちらともつかない絶頂の声が鼓膜を揺すった。途端にギユウウウ、ツと締まる女肉。互いに異なる媚肉感の少女たち。だが、果てる時は皆同じらしく、まるで螺旋を描くように肉壁が収縮し、ピツタリとペニスに食いついた。

そして、それを振り払う勢いで淫蕩ダブルヴァギナをぶち抜く勃起ペニス！

ギユニユニルルウウウ……じゅぼじゅぼぼぼうつつ!! ぐにゅじゅるぐばあああああ
あああああん!!

「あああああ——つつつ!! イいつつクうう——つつ!!!」

耳鳴りがしそうなほどの激嬌声。跳ねる女体。締まる膺。揺れる大小の乳房。舞い散る汗。そして——。

「おおうっ!! デる——っ! 出ちやうつつつ!!」

びしゆるっ!! びゆくびゆくびしゆるるつつ!! ボタボタねとつ、ヴゆるきゆるぶし
よああっつ!!

「ああはあああああああああああああああああああああんん!!!」

噴出される新鮮な精液。それは麗奈か、みちるか。姉か、恋人かの胎内に納まるはずだ
つたモノ。

しかし、運に任せて放った最後のペニスは、どちらのヴァギナをも外していた。時折納
まった二つの肉恥丘の隙間、そこに突き刺さり、二人の恥毛をかき分けながら盛大に雄汁

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>